

あゆみ通信

VOL 139

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

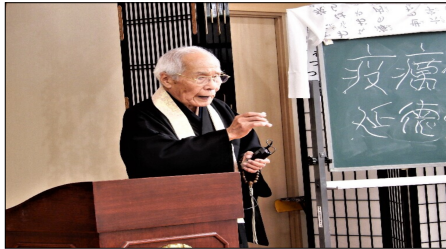
**残念ですが、当
分の間聞法会等
は中止をします。**

相次ぐコロナ感染拡大により、三蜜を避けるため第2組の仏事は中止になります。

皆様には、暑い夏を、熱中症とコロナ対策の為に、体調管理には十分ご注意くださいよう祈念しております。組長

聞法の楽しみが満喫

第2組門徒会員研修 大会&あゆみの会第 1回例会合同研修会



2020年月29日(月) 午後1時30分から、光照寺(墨林浩組長)をお借りして、コロナウイルス感染対策の完全防備のもと、合同研修会が開催された。

当初は3月に実施予定であったが、コロナ禍でやむなく延期していたもの。当日は門徒会



員、あゆみの会会員19名が参加し、墨林浩組長や、池田英二郎副組長、そして同朋の会推進員の喜左上恵子委員や松本隆信住

職(西教寺)にもご参加いただけた。

長い期間に、お会いできなかったご門徒同士が、またご住職とのお話が、あちこちで



和気藹々と交わされたことでした。

研修会は、吉田雄彦門徒会・あゆみの会副会長の進行で開会。真宗宗歌斉唱後、今年4月から組長就任の墨林住職からご挨拶いただき、続いて中嶋ひろみ門徒会会長から挨拶があった。法話は、講題を「信心について」と題して、

澤田秀丸先生(12組清澤寺前住職)からお話をいただいた。先生は「仏説無量寿経」や親鸞聖人、覚如上人、蓮如上人の言葉を紹介しながら、浄土真宗の信心とはについて話していただいた。そして、現状



に鑑み、蓮如上人の「疫癘えきれい」の御文について、自坊のご門徒さんとのやり取りを、ユーモアを交えながらお話いただいた。



質疑を受けた後、恩徳讃を斉唱。閉会挨拶を浪花博あゆみの会会長が行い、つつがなく終了した。

澤田秀丸先生法話要旨

おおよそ世界中の宗教で信心を説かない宗教はありません。信心はその宗教の根本であり、根源であると言えます。

我々浄土真宗の信心は何処に立つべきなのか、これを明確にしておかないと、私たちの信仰生活が崩壊してゆく、または間違った方へ進んでいきます。

今日は初めに我々浄土真宗の信心は、何処にあるのか、何処に立つのかということのみなさんと一緒に考えていきたいと思います。

まず信心ということをお釈迦さまの説かれた經典の中、この經典に(次頁へつづく)

大河の一滴

作家五木寛之の著作で、最近、2版が出された。

「存在するのは大河であり、私たちはそこを下っていく一滴の水のようなものだ。ときにとび跳ね、ときに歌い、ときに黙々と海へ動いていくのである。親鸞の「自然法爾」も、夏目漱石の「即天去私」も、たぶんそのような感覚なのだろう。

私たちの生は、大河の流れの一滴に過ぎない。しかし無数の他の一滴たちと共に大きな流れをなして、海へ下っていく。高い峯に登ることだけを夢見て、必死で駆け続けた戦後の半世紀を振り返りながら、いま私たちはゆったりと海へくだり、また空へ還っていく人生を思い描くべきときに差し掛かっているのではあるまいか。

『人はみな大河の一滴』

ふたたびそこからはじめるしかないと思うのだ」

先日の合同研修会で、講師の澤田秀丸先生の法話で、五木寛之氏の名前を聞き、1998年に購入した本を再度、読み返して思った。

人類の歴史は、疫病と災害と戦争の歴史と言っても過言ではない。今、直面しているものはそのものであると思う。現状は、阪神大震災以来。東日本大災害に原発事故、西日本豪雨等の数々の貴重な経験が防災対策に生かされていないと言う事実には啞然とする。今、改めて自身に問わなければならない。合掌。(本)。

如来よりたまわりたる信心 法然上人



(1面から)よって浄土真宗が開かれたという根本の經典が「仏説無量寿經」です。その下巻に

「作諸功德(さしょうくどく)信心回向」と書かれています。もろもろの功德を作(な)して、信心回向せん。

阿弥陀如来さまがもろもろの功德、功德と言いましたら、成し遂げられたすぐれた働きということですが、これから完成するものではないのです。もうすでに阿弥陀如来さまがなしてくだされた働き=功德。それをお考えになってそしてその中心である信心を回向される。これが浄土真宗の信心です。回向と言いますと、仏さまのお心が私に向かってくるのですが、たんに向かってくるのではなくて、ぐるりと私を包んで働いてくださる。これを回向と言います。私に



届いたら、私の力や考えに関係なく、私をぐるりと包んで働いてくださる。すなわち、向かって私に届くのが「摂取」、ぐるりと回って私を包むのが「不捨」。摂取不捨が回向という働きなのです。そうすると、阿弥陀如来さまは、すべてのすぐれた働きを、すでに成し遂げてその信心を私の上に届けて、私を包んでくださっています。これが浄土真宗の信心なのです。これを親鸞さまのお言葉で言いますと

「信心とと言うのはすなわち本願力回向の信心なり」阿弥陀さまが私たちにかけてくださった願の、その心を私の上に差し向けてくださったのが信心であります。

また「如来よりたまわりたる信心」如来さまからいただいた信心。私がする信心ではないのです。阿弥陀如来さまからいただいた信心です。これをもう少しわかりやすくおっしゃっていただいたのが本願寺第3代の覚如上人で、その書かれた著作「最要鈔」に「信心をば、まことの心と読む上は、凡夫の迷心にあらず、全



くの仏心なり。この仏心を凡夫に授けしめたもうとき、しんじんとはいわるなり」迷った心で言うものではありません。まったく仏さまのお心なのです。信心は阿弥陀さまからいただくものと、言われた。

さらにそれを具体的に述べられたのが、本願寺8代蓮如上人です。「仏心と凡心と一つになるところをさして信心獲得の行者とはいふなり」と。

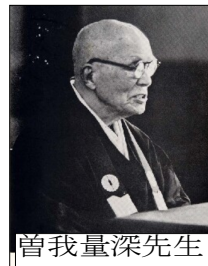
どう考えても、浄土真宗の信心は、私がする信心ではないのです。

では。信心をいただくというのは、何をいただくのか。

いただく？ご馳走をいただいたというのは、見ただけではいただいたとは言わない。ご馳走がお腹の中に入ったとき、「受容」受は手の上ののり、容は体の中に入る。これをいただくというのです。



金子大栄先生



曾我量深先生

何をいただくのですか。信心をいただく。信心は如来さまのすべての功德を届けてくださっている。

何をいただくの

ですか。

金子大栄先生はこれを明確に教えてくださった。「信心というのは言葉である。如来の言葉である。仏教の言葉を聞いていただく。ただそれだけである」明快ですね。聞信です。ただ一つに心は詰まりました。如来さまは自らの悟りの全生命を言葉にして私の上に届けてくださっているのです。何故かという人間の世界は言葉によって結ばれているから。人間には言葉のいる世界。浄土は仏仏相伝。通い合っているから言葉は要らない。曾我量深先生は「地獄は言葉の通じない世界。人間には言葉のいる世界。浄土は言葉のいらぬ世界」と言われます。言葉ですから、聴くことが大事なのです。聞くという姿勢が信心の心を生むのです。信心の心が聞かせていただくという人間の姿勢を生むのです。内にある信心が聞かせていただく姿になる。聞信で信心が出来上がる。ただ一つ、それだけです。浄土真宗の信心は。それに心がとられましたと言って、親鸞聖人が飲んで書かれたのが「正信偈」です。そうすると、言葉もいただくことが大事なのです。

(要約は、事務局です)

